

絵画用合成絵具の展色剤について

——ビニル樹脂とアクリル樹脂の同定の一方法——

園 田 直 子

はじめに

1. 合成樹脂展色剤
2. 分析方法：熱分解ガスクロマトグラフィー

3. 絵画用合成絵具

おわりに

論文要旨

今世紀になってから、有機化学の発展に伴い多くの合成の素材が開発されており、そのうちのいくつかは、絵具、ワニス、接着剤などの材料として用いられている。これらの新しい素材は、修復のみならず製作にも使われるので、博物館資料にも含まれるわけである。博物館資料の場合は、たとえ試料の採取が許されたとしても、その量は極く微量であることを、同定方法およびその実験条件の設定にあたっては考慮に入れなければならない。ここでは、同定方法として熱分解ガスクロマトグラフィーを用い、絵画用合成絵具の展色剤を分析してみた。フランスで一般に普及している7社8種類の合成絵具の展色剤を調査し、主成分（ビニル樹脂またはアクリル樹脂）のみならず、添加されている可塑剤も同定することができた。また、アクリル共重合体の場合は、それを構成しているモノマーの種類まで判明する。これらの分析結果により、絵具は、一度開発され市販されても、改良が続けられていることが明らかになった。しかし、構成成分の変化が必ず消費者に知らされるとは限らないので注意を要する。

博物館資料に使われ始めている新素材を、熱分解ガスクロマトグラフィーで体系的に同定した例は今まであまりない。しかし同方法を用いると、個体の試料をそのまま前処理を必要とせずに使えるので、試料のロスが少ないと利点がある。新素材の微量試料の分析には、有効な一方法であるので、今後いろいろと応用できよう。